

神さま生命をください

山崎弘子

主婦の友社

主婦の友社

山崎弘子

神さま生命をください

結婚したあ

主婦の友

毎月17日発売

★全国の書店での定期の購読をおすすめします。書店にご不便な場合は、本社まで振替でお申し込み願います。

★定期直接購読料(前金送料込み)は次のとおりです。

都内(23区のみ)	1カ年	3300円
	6カ月	1700円
地方(都下を含む)	1カ年	3800円
	6カ月	1950円

●新しいセンスの実用専門誌

別冊 主婦の友——奇数月の25日発売

もし落丁、乱丁その他不良な品がありましたら、おとりかえ
します。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

著者との了解により、
検印を廃止
いたします

神さま^{いのち}生命をください

—被爆青年との愛の記録—

定価 三五〇円

昭和四十三月八月一日 発行

著者 山崎 弘子

発行者 石川 数雄

印刷所 明善印刷株式会社
(カバ) 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 主婦の友社

郵便番号 一〇一
東京都千代田区神田駿河台一〇六
振替 東京 一八〇番
電話 東京 (294) 一一一一(大代表)



原爆で見ても無残な旧浦上天主堂。

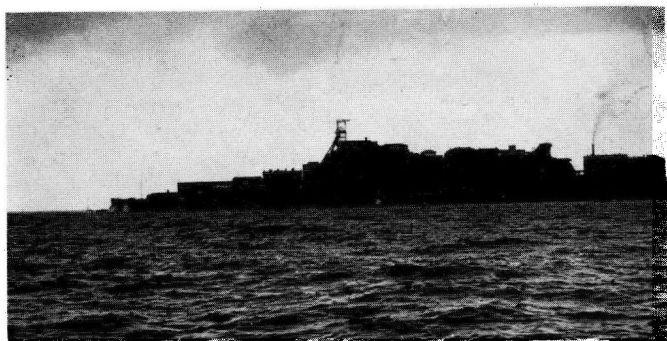
夫は、全国から寄せられたあたたかい友情の献血によって回復し、無事に私と奈津恵のもとに帰ってきました。思い出のハタ上げでにぎわう唐八景で。





花とハタ上げで、長崎の春は開く。唐
八景の山頂で開かれるハタ上げ風景。

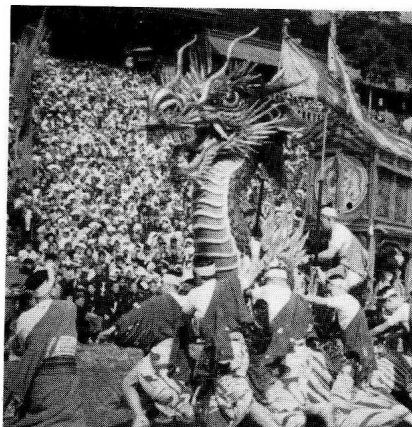
夕日でまっかに燃えた海をへだてて、「軍
艦島」と呼ばれている端島が見える。



長崎名物の精霊流しは、十五日の夜八時ごろから始まる。

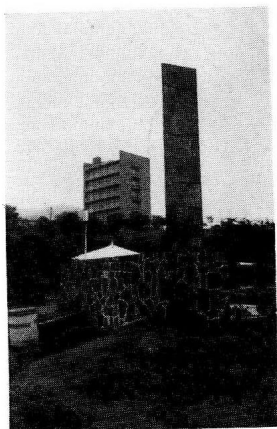


諏訪神社の秋祭りの蛇船。



長崎の夏は、ペーロンの太鼓の音とともに始まる——彼と見に来たペーロン競争。





長崎の原爆落下中心地。

アンゼラスの鐘が鳴る
浦上天主堂。



二月五日は、二十六人の信徒が
処刑された日で、二十六人の聖
ブロンズ像がその処刑跡に建っ
ている。

目次

第一章 愛を知るまで 9

みかんの花が咲く.....	10
ハタ上げ大会で.....	11
再.....会.....	14
釣りに行く.....	16
春の嵐.....	20
こうもりの青春.....	23
職さがし.....	27
血が足りない.....	31
週一回の通院.....	37
兄に紹介されて.....	42
夕.....風.....	45
引っ越し.....	50

第二章 結婚を決意するまで

海 水 浴	53
ホオズキ祭り	56
被爆者の怒り	61
あの人の母に会いたい	62
看護助手	66
被爆者とわかつて	68
手 紙	76
告 白	81
父子で入院している	85
ヨッパライの死	89
死が招く	90
渚 で	94
被爆者は三十万人いる	96
風頭の小道まで	100
不吉な前兆	107

目次

第三章 出産を決意するまで

オランダ坂で	109
元旦のデート	114
交通事故	120
結納	123
嫁ぐ朝に	127
結婚式	130
台所に頭がいたい	136
パートと内職	138
精霊流し	143
お月見	149
おくんち	151
妊娠を祈る	155
蛇踊り	160
想像妊娠	165
胎児への恐怖	167

終章 三回目の入院をする

妊娠中絶	172
遺伝と迷信	179
転々	181
神よ、赤ちゃんをください！	184
出産の支度	191
母となる	195
奈津恵と名づける	201
出血が止まらない	208
現代の吸血鬼	212
三枚の畳がある	217
渚の別れ	220
あとがき	226

第一章

愛を知るまで

みかんの花が咲く

長崎の春は早い。

三月の声を聞くと、もう桜が咲き始める。

それから郊外の山袖のだんだん畑のびわの実が色づいてくる。そして変わりやすい春の天候もすっかりおちついてくるころになると、やがて山腹のみかんの花の香りがただよってくるのである。

長崎市街から東南に六キロ半余——離れた茂木^{もぎ}の港。その三方を山で囲まれ、若菜^{わかな}浦^{うら}の入江を見おろす、小さな谷間にある私たちの生家では、毎年、みかんの花の匂いに春を知らされる。

その朝、母は三カ月ぶりに床を離れた。

珍しく風もほどよく、雲一つない、絶好の行楽日和^{びより}にさそわれて、私は小学校四年生の妹のマキにせがまされると、九時すぎ家を出た。

昭和三十九年四月十二日——日曜日。マキの誕生日でもあった。

地元の長崎新聞社主催のハタ上げ競技コンクール^{こうくう}が唐八景^{からやけい}の山頂で開かれる。私はまるで小学生が遠足に出かけるようにはしゃいでいた。

愛を知るまで

久しぶりの外出だった。

田上峠の停留所でバスをおりると、交差点でおまわりさんが、交通整理に汗だくになっている。

家族連れやアベックの見物客や、参加者たちが、唐八景の山頂へつづく赤土の坂道を長蛇の行列を作って登っていた。

手に手に自慢の手製のたき風呂をかかえ、リュックをせおい、水筒をかけている。

どの顔も明るい。

晴れやかな顔だった。

春が来たというよろこびに、どの人も生き生きとしている。

私はマキの手をにぎり、その雑踏の中を歩いた。

胸がはずむ。

花とハタ上げで、長崎の春は開くのである。

ハタ上げ大会で

風呂は中国から日本に渡ってきたものとはかり思っていたら、ジャワの諸島で土民が上げていたという。

開会式のあいさつの中で長崎新聞社の社長さんがそう話された。

でも、長崎の凧は普通の凧とは違う。シッポがない。

縦に割竹を削った親骨のまん中に横の子骨を十文字に渡し、両端を弧状にたわめて紙を張っている。

そうして麻糸にガラスの粉末をまぜて固めたビードロがついているのである。

ハタ上げは、ただ凧を上げるだけではない。うまく風の力をつかって、空中で上下にからみ合わせて戦う。

凧の空中戦なのである。

空から切られて落ちてくる凧は、長い竿の先にいばらの枝を結びつけたヤダモンをかいでからみとる。

お弁当をひらいて酒のさかなに、ビールを飲みながら見物している群集も、そのときになると、いっせいに席を立てて追いかける。

一枚の凧を数十人で奪い合う。

数百の小鳥のように空中を高く乱舞しながら、凧がからみ合う光景は、美しく壮快であった。

母の看護に追われて疲労した私の、ともすると沈みがちな重苦しい気持ちも、競技に参

加しているうちに、晴れ晴れとしてきた。

それにしても、不慣れな私と幼いマキの戦力では、壮絶なハタ上げには勝てそうもなかった。糸を力いっぱい握りしめて風を上げていても、ものの三十分もたたないうちに、すぐ切り落とされてしまった。

私は風を追って山上の芝生を駆け出した。

私があの人に出会ったのは、そのときである。

マキが一晩がかりで苦心して作った三色旗の風は、少年たちが追いつめ、奪い合っていた。

私は懸命になってその一団の群れの中に飛び込んだ。

どうしてたった一枚の風にそんなに夢中になったのか。自分でもよくわからない。

せめて競技に負けても、妹の作った風だけはマキに持たせて帰りたいと、一心になっていたのかもしれない。

長崎新聞社のテント席後方のやや急な芝生の斜面から、マキの風をさし上げながら、あの人は登ってきた。

「あら?!」

私は息をのんで見つめた。

彼は新聞社の腕章をはめていた。

私はホッとした。

ハタ上げ大会の参加者にでも拾われたら、それこそもうおしまいである。

私はその人をまぶしいように遠くから眺めた。

新聞社の人だというだけで、本の好きな私は、何かしらあこがれを抱いている。

私がたじろぎモジモジしている間に、マキは駆け寄って行った。

彼は浅黒い顔をほころばせ、素直に返してくれた。

私はそつと会^{えしやく}釈をした。

再 会

四月十八日の土曜日の夕方——私は上の妹のタカ子にさそわれて、浜の町のマーケットの隣にあるパチンコ店を覗いた。

安あがりでスリルのあるこの遊びは、長崎でもたいへんな人気がある。

サラリーマンや、勤め帰りの若いオフィスガールでいっぱいだった。

母の病状が快方に向かっている日には、私はよく街に出る。そしてきまってパチンコを楽しむ。